

【佳作】

右利きの君

人間科学部 人間科学科4年 田波 真帆子

榊透は自分の名前にまた若干の違和感を持ちながら、解答用紙に名前を書く。これで五回目だった。

長かったテスト週間を乗り越え、至福の休日を終えるとテスト返しの日々が始まった。もともと頭脳は優れているため点数はよい数字ばかりだった。そんな透にとってテストの解説は退屈な時間そのものだった。

だから、退屈凌ぎになんとかなく、ペンの持ち手を左手へと変えた。意味などない。ペン先を問題用紙に押し付けて滑らせたのだから、言うならば好奇心の他ない。

一画目。思いの外、滑らかに滑った。書こうと脳裏に浮かべた漢字は苗字の「榊」だった。

透は「榊」という漢字が特に、慣れずにいた。画数は多いし真四角に均等に埋めることが困難だった。

利き手でない手で文字を書くところなるか。書くこと自体はできるだろう。ただ、無駄な力が籠ってペンの先端は震え迷子になり、線はガタガタのなよなよであらぬ方向に跳ねていく。字が汚い人の方がましなのではないかと思う程に不格好な文

字が出来上がる。それが普通なのだ、利き手でない手で文字を書くということは。

問題用紙の余白に浮かびあがった「榊」という字はどうか。まるで書き慣れているかのような滑らかさがそこには宿っていて、真四角に美しく収まるほどのバランスの良さだった。

そんなことあり得るだろうか。しかし真つ白の紙に書かれた「榊」は確かに透の左手が書いたものだった。

では「透」という漢字ならばどうか。榊と比べ、斜めに滑る線が多く、ついでにしんにょうもある。

透は「榊」の横に続けて、その字を書いた。胸が高まる。習字でも習っていたのかと思う程に美しい「透」が浮かびあがった。

しかしそれだけではなかった。そこに書かれた榊透という名前が、なんともすんなり透に馴染み染みわたっていく感覚があった。

思わず背筋が凍った。ペンを左手から分離させる。自分の左手のひらをいっばいに広げて見つめる。透は、果たして左手は自分のものなのか疑念を抱いた。それぞれの指に力を入れて思うように動かす。漏れることなく全てが透の思うままに動

いた。左手はやはり、確かに透のものだった。

ペンを持ちかえて、改めて右手で字を書く。なよなよと不格好な字、というほどではないが所謂男性らしき字が浮かぶ。なるほど。では、自分は過去に書道でもやっていたのかと振り返ろうとするが、そもそも書道ならば右手だと思に至る。

テストの解説が終わると、次は体育の授業が始まった。外でハンドボールの時間は、運動音痴の透にとって最悪な時間の他なかった。

先生が勝手に決めたチームに分かれてまずはキャッチボールから始まる。運動のできない透は勿論、ボールを扱うこともままならなかった。周りの人を見做って、ボールを右肩の後ろから前へと飛ばす。しかしそれは思うようには飛ばず、すぐその地面に叩きつけられたり、あらぬ方向へと飛んでいく。持っていたはずのボールが飛ばす前に落ちることもあった。その度にクラスメートは苦笑いをする。その瞬間が透にはいたたまれなかった。

そうしてまた今日もボールが回ってきた。キャッチするだけで精一杯だというのに、対角線上にいるクラスメートにボールを投げなければい

けない。その時透は思いつく。どうせ利き手で投げた所で届かないのなら左手でやってみても同じだろうと。結果が同じなら試してみたっていいだろう。そう思い、ボールを左手に持ちかえ、投げる。

利き手だと、どうしても動作がカクカクとしていたのに、左手はなんと滑らかな動きをするのだろうか。指先から離れたボールが、地面から大きく距離をとって美しく放物線を描くように前方へと飛んでいった。同じチームの人たちは皆、驚きの声を控えめだが漏らした。透は中でも一番驚き、啞然とした。

ボールをキャッチしたクラスメートは「ナイス!」と言いながら透に向けて親指を立てた。

その後、簡単な試合を三回した。透は左手を使ってボールを操った。左手を中心に、身体全てが連動し、自由自在に動いていく。想像していた通りにボールが動いていく感覚が面白くて仕方がなかった。過去に球技でも習っていたのだろうかと振り返ろうとするが、透にはそれができなかった。単に身体が鈍ってしまっているだけだろうか。

太陽の光を浴びて全身を使ったあとの昼食は格別だった。いつもなら自らボールを追うことなどない。誰の邪魔にもならないよう、粉で引いた白線のぎりぎりに突っ立っていた。それが何よりのチームへの貢献だったからだ。

弁当はいつも一人で食べていた。たった一日、まるで人が変わったかのようにボールをゴールに入っても、クラスメートは警戒しているのか今日も

一人、空き教室で弁当を食べていた。しかし透にとってそれは好都合だった。

未だ半信半疑な左手との新たな挑戦の時だった。流石に箸を使うことはできない。そう思いつつもできてくれと願う自分があることを認めずに左手に箸を握らせた。

なんてことだ。細かい動きまで、まるで知っているかのように使いこなせている。右手でももちろん飯は掴めるし運べるし食べることはできたが、何のストレスもなく、何でもない風にして箸を操作できることに思わず震えた。

食べ終わる頃、透は考える。もしかしたら自分は左利きなのではないかと。しかしそんなことはあり得るのだろうか、と過去を振り返り、かぶりを振る。

今の透には、一年と少しの過去しかなかった。事故に遭った後遺症で記憶が飛んだと医者から説明されていた。過去が真っ白のフィルムに上書きされたまま今に繋がっている。もう過去の自分と会うことはできないのだろうかと言ひ、生きてきていた。

周りが右利きばかりだからと、当たり前のように右手を利き手として使ってきたが、果たして透の利き手は右であっていただろうか。後遺症を患った例の事故で透の親は他界した。親戚は透の利き手まで把握などしていない。クラスメートも記憶喪失の転校生の過去など何も知らない。それならばやはり、榊透は左利きの人間なのではないか。

もし左利きならば、本来の自分はどんなに美しい人間だったろうかと、透は思わずにはいられなかった。いや、ぎつちよという言葉があつたくらいだ、左手が美しいなどおかしいことなのかもしれない。が、透はやはり左手の自分に羨望を抱いた。

白で塗りつぶされてしまった過去に、何か上書きできないだろうか。過去の自分との唯一の繋がりにある左利きを、これから死ぬまで使い切れれば、過去が彩るかもしれない。

そう思った透は生まれ変わったような清々しい気分になって、左利きの榊透に「よろしく」と呟いた。

コメント

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。利き手ではない手で字を書いたりボールを操ったり、箸を使うというのは難しいです。でももしできちゃったら……なんてちよつとあり得ない風の話を書いてみました。利き手をテーマに書くとしたきっかけが日常の中に転がっていたのですが、そのきっかけがなんだったかはもう忘れてしまいました。過去が見えなくても、過去があるから今があるのだとか、当たり前の人生が時に苦しかったりもするのかもしれません。